

---

SEED

ズタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SEED

### 【著者名】

ズタ

### 【あらすじ】

特殊能力「SEED」を所有する主人公「滝川 薫」は表向きは高校生、裏向きは「黒き暗殺者」<sup>ブラックカーネイジ</sup>として活動している。何が正義で何が悪か、何が正しく何が間違いかを葛藤しながら自分の正義を貫きながら能力者達や悪党達と戦うお話。

## プロローグ「黒き暗殺者」（前書き）

自分はただの学生なので小説を書くのは初めてですが頑張って書きたいと思います。この作品は一応色々な視点で見る作品です。その内の一人のお話です。自分のペースで書くので長く待たせたりしてしまいます、その辺は温かい目で見てください。少しづつ投稿するつもりです。投稿間隔はランダムです。

## プロローグ「黒き暗殺者」

プロローグ  
ブラックネイジ  
「黒き暗殺者」

悪。それは弱者を力で抑え付ける者のこと。  
悪。この世から消えなき者。

だから、裁くのだ、彼らを。弱者を痛めつけ、弱者を騙す悪を。  
彼らを裁くことに何の躊躇もしない。同じ人間でも中身が違うのだから、悪はそう簡単に変わらない。だから裁きを与える、殺しはない。そして気付くはずだ、それは悪いことであると、いつかきっと気付いてくれるはずだ、あの憎い奴らも。自分たちが犯した罪に気付くはずだ。だから裁く。悪はこの世に存在してはいけない。死の恐怖と言う鎖を作るのだ。そうすればいつかきっと…、悪意をもつて悪事をしないはずだ、罪を背負おうとするはずだ、そういうつかだから俺は悪を裁く偽善者になるのだ。

## プロローグ「黒き暗殺者」（後書き）

お読みになつてくださいがありがと「ついで」こまます。  
変なところやぬかしいところがあつたら指摘してくださるとありがたい  
です。感想や質問をどんどん書いてください構いません。それで  
は次回をお楽しみください

出でい？

ジリリリリー・ジリリリリ！

「ひるひこ時計のアラームをまた叩いて止める、何回止めただらう？」

……

「あー——————！ 今日入学式じゃん！！」

少年はそう叫びながら布団から飛び起きた。少年は急いで制服に着替え、朝食も取らずに家を出た。

今日は少年、滝川 薫が入学した高校の入学式なのだ。

今日から合格した朝日高校の一年生。と言つても普通の高校だ。唯一取り柄なのは朝日がよく見える位だ。だから朝日高校なのだろう。

街の人混みを駆けていると、コースが聞こえてきた。良く聞くコースだ。

『 昨夜未明、麻薬を取り扱っていたと思われる2名が何者かに襲われた模様です。』

昨日やつたことが早速ニュースになつてた。そう、昨日の夜いつも通りに「ブラックカード黒き暗殺者」（勝手に付けられた名前だけ）として夜を徘徊していたまたま麻薬の売買を見つけたのでとつちめてやつたのだ。本来なら悪さをしてる不良やヤクザをぶちのめすために活動してるのに麻薬の売買者をとつちめることになるとは…。ま、麻薬の売買なんてやつてたんだ、悪さをしてることには変わりない。罪悪感なんて無い。気絶させて縛つただけだし。…間違つてないよな…俺。そんな事を考えながら走つていると誰かとぶつかってしまった。

「 いつて！」

「 キヤツ！」

「いてて、あ、ごめん！大丈夫！？」

急いで起き上がり衝突した人に手を差し伸べる。

「すみません、考え方してたもんで…」

「いえ、こちらこそすみません」

そこで初めて目が合つた。金髪の可愛い女の子だった。  
可愛い子だなあ…。ってそんなこと考へてる場合か！

「あの、大丈夫ですか？」

少しきこちなく聞いてみる。

「はい、なんともないです…」

女の子も何故かきこちなかつた。何故だろう？ふと街の時計を見ると30分前だつた。頭を切り換えて落ちた荷物を慌てて拾つた。

「すみません！時間が無いんで俺はこれで！」

女の子がなんか言つていた気がするが適当に頷いてその場を去つた。学校に着くまでずっとぶつかつた女の子のことを考へていた…。

## 出会い？（後書き）

お読みになつてください。ありがとうございます。  
変なところやおかしいところがあつたら指摘してください。あと、ついでに感想や質問をどんどん書いてください。構いません。それで  
は次回をお楽しみください。

## 出会い？（前書き）

今回新しく出るメインキャラ紹介

リンダ・リンス 15歳

今作のメインヒロイン。明るくて積極的な性格。薫に一目惚する。

天野秋 15歳

リンダの親友で良き相談相手。友達には優しいが他人にちょっとキ

ツい性格。  
祭木光 17歳

しつかりとした性格で頼れる姉のような存在。その反面頑固なところ

があるのが玉に瑕。  
天宮御門 16歳

いつも読書していて自分から行動しない。感情を表に出すことが無く落ち着いた性格。

## 出会い？

「行っちゃった……」

その言葉を発し終わつた時には薰の姿はもう少女の視界には居なかつた。人混みで見えなくなつたかもう見えないとここまで行つてしまつたかのどちらかだろ？ ぶつかつた拍子に落ちた薰の携帯を見つめながら少女は自分の気持ちを整理していた。

何だろうこの感じ…、ドキドキする。一目惚れ…？ 確かに格好良かったけど…、何か違うんだよなあ。格好いいからとは違うんだよね。何だろう…変な感じ。

自分の気持に戸惑いながら少女…リンダ・リンスは待ち合わせしているお気に入りの喫茶に向かった。

「本当に大つきいねえ…」

私は目の前にある巨大なパフェを見ながらそう言った。

「流石に予想外の大きさだわ…。念のため四人で来て良かつたわね…。」

誘つた本人の光も青ざめている。その反面光の隣のミカは平然な顔で「そお…？」って言つてる。自信もあるのかと思つたけどミカのキャラでは良く解らない。

「ねえミカ～、もう少し驚いたりしたら～？」

「…別に」

「女の子ならこう明るくなくちゃ」

大げさに可愛い仕草をしたが見事にスルーされた。何か言つてくれないと逆に恥ずかしいよ…。

「そんな事より食べよ？」

隣のアキが私を宥めながら切り出した。

「そうね、折角の休日が無駄になつたら元も子もないしね。ちゃつちやと食べましょ」

数十分後にはほとんどパフェが無くなっていた。

「意外と行けたわね」

「そうだね~」

「ミカも意外と食べたし。好きなの?」

「スワイーツは好き…。」

わんやわんや喋りながら残り少ないパフェをみんなで少しづつ食べて見事に完食した。

気が付くと外には始業式を終えた学生達が歩いてた。今朝ぶつかった学生の事を思い出し携帯を取り出した。ついで落とした携帯もちっぱなしだなあ…。

「あれ? リンダってそんな携帯もってたっけ?」

「ん? ああ、これ? 今朝ぶつかった学生の落とし物」

「へえ~、ちょうど帰りの時間だし返しに行つたら?」

「でも学校先が分からぬいし…。」

「落とした場所にまた来るだろ? し、そこで待つてたら? 顔は覚えてるんでしょ?」

「まあ、一応は…。」

今朝の事を思い出していたらまたドキドキしてきた。…まさか本当に??

「どうしたのリンダ?」

「えつ~づうん何でも無い! ジャあ私少し行ってくるね!」

少しでも早くここを出たかったからちょっとと急いで出る。

「お会計お願いね~!」

手を振りながら私は喫茶店をさつた。ドキドキする気持ちを抑えながら…。

## 出会い？（後書き）

お読みになつてください。ありがとうございます。  
変なところやおかしいところがあつたら指摘してください。修正を  
です。感想や質問をどんどん書いてください。構いません。修正を  
入れる可能性あるので、承ください。それでは次回をお楽しみく  
ださい。

## 出会い？

現時刻1時半過ぎ。

リンダは薰の携帯を拾った時計の前に立っていた。  
私は空を見ながらぶつかつた子の事を考えていた。  
本当に好きになつてゐるのかな？本当に一日惚れしてゐるのかな  
？どうなんだろう？……？結局は分からぬ。……また出会えれば  
分かるよね。きっと…。そんなことを考えてたら声をかけられた。  
でも目的の人では無かつた。

「君一人？だつたら俺らと遊ばね？」

面倒なのに捕まつちやつたな…。

「…私、人を待つてゐるんです」

「いいじやんかよ～、そんなやつほつとこてせ」

「…私に構わないでください」

「そんなつれない事言つなよ。そんなことよつ遊ぼうぜ」  
いきなり腕を掴んできた。

「離してください」

「今のうちに言つ事聞かないと痛い目みるよ嬢ちゃん」

面倒くさいなあ。能力使ってノシちゃうか？でもこじりじゃ人目を  
引くし。どうしよう。誰かが助けてくれるのが一番なんだけどね。

…そんな勇氣ある人居るわけ無いよ。

そしたら何故か今朝ぶつかつた子が思ひ浮かんだ。…まさか、そ  
んな都合良くなってくれるわけ…。

「おい、やめろよ。嫌がつてるだる」

…え？

「何だよてめえ、ヒーロー気取りか？あ？」

「…ヒーロー…か、ある意味あつてゐるな」

もう一度良く見る。……やつぱり、今朝ぶつかつたあの子だ。

「はあ？」

「そのままの意味だよ。それに、その子に用があるし、知り合いなんだ」

何で来てくれたんだろう。いや、携帯を探しに来てたまたま来たのかな?

そんなことを思つていたら不良が私の腕から手を離し臨戦態勢になつていた。

「ああ、成る程。てめえが待ち人か。ちょうど良いてめえが居なくなりや遊べるつて訳だ」

…何言つてるんだか。遊ぶなんて一言も言つてないのに…。きつと自己中な馬鹿なんだろうな…。

「待ち人?」

「てめえのことだらうがよ。とぼけてんじゃねえよ…」

不良がいきなり殴りかかってきた。が薰はそれを簡単に避けて、溝に一発ぶち込んだ。

「おげえっ!!」

「正当防衛成立…」

薰がそう咳き終わると不良は倒れた。

「てめえ!」

もう一人の不良がさらに殴りかかってきた。薰はそれを難なく避け…

け…

「先に殴つてきたのはそっちだらうが、よ!」

見事にボディーブローが不良に決まった。

「お!」あつ

もう一人の不良も力なく倒れる。勝てないと悟ったのか、残つた不良が倒れた不良達を抱え、

「くそつ!覚えてろ!」なんて捨て台詞を言いながら逃げていった。わあ、簡単に倒しちゃつたよ。にしても動きが良い、良すぎる位に…。訓練されてるのか身体関係の能力者かな…?

リンダは少し考える。最初に殴りかられた時、不意打ちに近いのに簡単に避けた。さらに綺麗に溝に一発…。何かの訓練でも受け

てるのだろうか？それとも…

「ふう。君、大丈夫？今朝ぶつかつた子だよね？」

「あ、はい。そうです」

不意に声をかけられたが冷静に対応し、すぐに思考を変える。

「やっぱり。あのさ、今朝ぶつかつた時そこら辺に黒い携帯落ちてなかつた？」

「これですか？」

リンダはそう言つとポツケから拾つた携帯を取り出した。

「あ、それそれ。ありがとう。拾つてくれたんだね」

「あの時急いでたみたいだから渡せなくて持つてたんです」

「あ、あの時か。あの時登校初日なのに寝坊して遅刻しかけてたんで急いでたんだよね。ごめん」

彼はアハハと苦笑しながら頬をポリポリしてた。話しているとドキドキしてきた。

「……あの返してくれるかな？」

私はまだ彼の携帯を握つていた。それに気が付くとすぐに彼に渡した。

「あっ、ごめんなさい！」

「んっ、ありがとう。それじゃ」

彼は目的の物を受け取ると帰ろうとした。……何だらう。……何でだろう。……何で、まだ居たいと思つんだろう。

「あ、あの！」

少し大きな声で呼び止める。ちゃんと聞こえたのかじつちを振り向いてくれた。

「さつきのお礼をしたいから、一緒にレストラン行きませんか？」自分で言つたことが恥ずかしい。でも本心である。まだ彼と一緒に居たい。何故かそう思つたから。

少し考へてゐるのか、返事が少し遅かつた。

「……うん。良いよ」

その時、彼の顔を見て私の気持ちは確信になった。……私は、  
が好きだ。名前も知らない彼に、一目惚れしていたのだ。

## 出会い？（後書き）

少し遅くなつてすみません。  
お読みになつてくださいがと「ひ」ぞこます。

変なところやおかしいところがあつたら指摘してくださるとありがたい  
です。感想や質問をどんどん書いてください構いません。修正を  
入れる可能性あるのどこへ承ください。それでは次回をお楽しみく  
ださい

## 出ない？（前書き）

夏休みが明けたので土日のびっничに更新します。末永く暖かい日で見守ってください。

メインキャラ以外はキャラ紹介しません。

## 出会い？

俺、滝川 薫は現在、携帯を拾ってくれた金髪美少女とレストランに居ます。……なんでこいつなった……。約1時間ほど前…

「なあ薰）。もう携帯買つたんだる~?アドレス交換しよづぜ~「買つたけど……」を付けるな を」

友達にツツコミながらポケットに入れてある携帯を探つた。しかし目的の物は出なかつた。なら反対だなと思い反対側のポツケを調べても見つからず、なら後ろポケ、バック、机とあらゆるとこを探したが見つからなかつた。

「どこいった……」

「買つた次の日になくすとかお前すぐえな……。家に忘れたとかじやないのか？」

友達に飽きられながら記憶を遡つた。朝出る時には持つてたし、……あ。

「あの時かあ……」

「あの時つて?」

「実はさ、今朝急いでて女の子とぶつかつて荷物ぶちまけたんだよ。その時に落ちたのかも知れない」

「今朝急いでて女の子にぶつかるとかどこのマンガの展開だよ」

「仰る通りでござります」

友達に笑われながら自分に呆れてた。確かに中心街のシンボルの時計の前だつたよな?ぶつかつた子が持つてるかな?何か言つてたし(急いでたからスルーしたけど)、携帯のことだつたのかな…。もしそうだつたら持つてるかも知れないな。ダメ元で行つてみるか…。

「俺携帯探しに行つてくる」

「アテでもあんの?」

「まだ笑うか。まあ一応は…」

半信半疑だが。そういうえばぶつかつた子すくく可愛かつたな。  
何か思い出したらドキドキしてきたな……。俺はその時、男の生理現象だと思っていた。その時は。

そして不良に絡まれてこの子を助け現在に至ると…。つわ～身体が熱くなってきた。さつきまで良く平静で居られたな俺。ある意味不良どものおかげだけ…。

「あの…」

「ん?」

「さっきは助けてくれてありがとうございました。私、リンダ・リンスつて言います」

「ああ。そんな大層なことをやつてないよ」

不良に絡まれたりしてる奴は良く助けてるから助けなれてるし…。  
アレで。にしても金髪美少女と一緒にレストランに居るつてだけでドキドキするぜ。恥ずかしいもあるような照れもあるような嬉しいもあるような。感情がこんがらがっていた。

「あの、あなたのお名前は?」

「俺?俺は滝川 薫。今年から高校生だよ。言わなくとも分かるか  
俺は苦笑しながら顔が赤くならないように踏ん張つてた。変な風には思われたくないしな。あ～ドキドキする。……もしかして恋?そう考えたらすぐドキドキしてきた。うまく言葉では表せないが、すつごくドキドキしてきた。

「どうしたんですか?」

「い、いや何でも無い」

ちよつとわたわたする。少し考えたら意識しちまった。目合わせらんねえ…………。

「あの、お礼がしたいんで何か食べません?お~りますから」

「いや良いよ。申し訳ないし」

「お礼をしたいんです!折角助けて貰ったんだし……」

リンダが顔を赤らめさせながら目を反らし、人差し指と人差し指

でシンシンし始めた。男の子と行くの初めてなのかな？俺も女の子と行くのは初めてだけさ……。

「じゃ、じゃあ。お言葉に甘えさせて貰います」

「……はい！」

リンダがぱーっと笑顔になつた。何が嬉しいんだろう？女の子はわからんっと思いつつもその笑顔を見れて満足している自分が居た。

俺は出来るだけ安めの物を頼んだ。リンダも安くて量が少ないのを選んだ。

最初は一人とも空気がぎこちなかつたが、話すにつれ空気が柔らかくなつていき、二人とも普段の口調になつた。少なくとも俺は。色々な事を話しながら食事をした。話に夢中になつてゐるうちに外はもう夕日が沈みかけ、夕方になつていた。

「もうこんな時間か……」

携帯を見ると五時を過ぎていた。

「そろそろお別れかな……」

リンダもどうやら帰る時間みたいだ。少々名残惜しいが仕方が無いか。

「じゃあ、そろそろ切り上げよっか

そう言って俺を席を立つた。

「あ、待つて！」

「ん？ 何？」

「折角会えたんだしメアド交換しない？」

「ああ良いけど。」

そして俺はリンダとメアドを交換してお別れした。まさか電話帳に最初に載るのが（姉ちゃんを抜いて）金髪の美少女とは。そう考えると少しにやけてしまつた。遅刻しかけたけど良い一日だったな。

「さて、家に帰るか……」

リンダの事を少し考えながら俺は帰路を目指した。

## 出会い？（後書き）

お読みになつてください。ありがとうございます。

変なところやおかしいところがあつたら指摘してください。修正を入れる可能性あるので、承ください。それでは次回をお楽しみください

書いていると自然と文字数が増える物ですね。アハハ

## 出会い？

「ふんふんふん」

「……珍しいね、リングダが鼻歌を歌うなんて。良いことでもあった？」

「うん！あの後良いことがあって」

リングダは自分に酔っていた。それもそのはず、好きな人とレストランで一緒に食事して色々な事を話し、メアドも交換したのだ。恋する乙女にとつてこれほど嬉しいことは無いだろ。

「何があったの？」

「うーんとね。…あ、ちょっと待って」

「何？」

「ドアとか開いてないよね？」

リングダはそそくさと動き、ドアや窓を確認しては開いてるところを閉めた。リングダがこういう行動をする時はルームメイトであり親友であるアキに話す事があるか相談する時だ。リングダは全部の窓やドアをチェックするとアキの隣に座つて話し始めた。

「それで？何があったの？」

「うん あのね？携帯を拾つた時計のどこに行つて携帯の持ち主を待つてたんだよ。そしたらね、不良に絡まれちゃつて」

「ええっ！？大丈夫なの？」

「うん。そしたらね、偶然携帯の持ち主が来て助けてくれたの！助けに来てくれたりしないかな～？つて思つたら本当に来たんだよ？すごくない！？」

「へへ、そんな偶然もあるんだね。良かつたじやん。それで？」

「そしたらあつという間に不良達を倒したんだよ！殴りかかってきたのは二人だけ…」

「なんで殴りかかってきたの？」

「そいつ馬鹿でね。その持ち主を倒したら私と遊べると思つてぶち

のめそうとしたみたい。もう一人はその馬鹿がやられたから仕返しに殴りかかってきたけどこっちも簡単に終わっちゃった

「本当にとんだ馬鹿だね。まさに大馬鹿。といひで持ち主の名前は

分かるの?」

「あ、うん。滝川 薫って言つてた。私は薫つて呼んでるけど」

「へ～滝川君ね。あ、続きをどうぞ」

「うん！それでね、お礼にねレストランに誘つたんだよ。そこで食事しながら色々な事を話したの」

「今日のスペシャルパフェ食べたよね？よく食べれたね…。」

「少ししか食べてないから大丈夫だよ…」

「お肉つかないと良いね。それで？その後の展開は？」

「メアド交換してさよならして現在に至ります。すっごく楽しかった！好きな人とお話ししたり一緒に食事したりするのってすごく楽しくて幸せだつた……。一緒に居るだけでドキドキするものなんだね…。でもお別れしたら少し寂しくて…切なかつた。でも思い出すとまた幸せな気分になれ… ポワワーン」

「あはは…。まだ恋したこと無いから良くなきゃいけないけど良かつたね。幸せになれて。私たちの田標に近づいてるじゃん。」

「うん。そうなるけどちょっと違う気がするな…」

「何で？」

「だって「みんなが幸せになる」が田標でしょ？私だけが近づいてもちよつと違う気がするな。」

「一理あるけど、結局は個人個人が幸せにならなきゃいけないんだしさ。それにみんな同時に幸せになるなんて難しいでしょ？だから一応田標には近づいたよ」

「うん、そうだね…。」

「がんばってねリンダ。応援してるよ。リンダの恋」

「…うん。ありがとう…。」

「それに」

「それに？」

「コンダとかと話してただけでも幸せだよ、私は。だからみんなも少しあは幸せのはずだよ。「あの頃」よりは…ね」

「……うん…」

「わっ。抱きつくなー!」

「だつて嬉しいんだも~ん」

今思えば少しあは人並みの幸せは揃んでるよな、私たひ。「あの頃」よつは…わっと…。

## 出来事？（後書き）

お読みになつてください。ありがとうございます。

変なところやおかしいところがあつたら指摘してください。あとがたいです。感想や質問をどんどん書いてください。構いません。修正を入れる可能性あるので、承ります。それでは次回をお楽しみください。

恋愛感情のところは自分の体験談をもとにしています。きっとみんな同じ気持ちだよね、恋してるなら。

田嶺二郎（福島県）

~返のなかとじたまひです

## 出会い？

夕方の六時を切った。もう外は夕日が沈み暗くなっていた。

「頃合いだな…」

薰は外が暗いことを確認し、棚の暗い隅っこからあるはずの無い黒い服とフード付きの黒いコート、黒い手袋を取り、着替えた。

「さあて、今日も張り切つて悪党退治しますかね…」

薰はそう言うと窓から飛び降りた。

しかし、薰の姿は着地する前に消えていた。

近くでは不良達が話してた。酒を飲みながら話す奴も居ればタバコを吸いながら話す奴も居る。その話の内容はブラックカーネイジの事だった。

「今日もやつてたぜアイツのこと」

「またかよ。ヒーロー気取りかよ」

「でも結構やられてるのも本当だぜ？俺のダチの一昧も全員しめられたつて」

「でも人を襲わなければ襲われないって噂だぜ？」

「ああ、その通りだぜ？」

不良達が一斉に声のした方向に振り向く。だがそこには人の姿は無く、聞こえるのは声だけだった。

「お前達が誰かを襲わなければ俺は何もしないぜ？あん時だつてカツアゲ何かしてるから止めたら襲つてきたから返り討ちにしただけだぜ？」

尚も誰も居ないとこから声が聞こえる。不良達は見えない恐怖に襲われた。一人の不良は近くの鉄の棒を手に取っていた。

「攻撃しないならこっちからは何もしないぜ？だからその物騒な物は捨てな」

そう言つと不良の腕を誰かが握った。

「ひつ！」

不良の恐怖のあまりに鉄の棒を離してしまった。

「何もしなければ何もしない。別に意味も無く襲わないぜ。何もしなければ、な」

不良の腕を離し、それは静かに去つて行つた。

「これでいいつらが悪いことしなければ良いんだけど」

歩きながら薫はふとつぶやいた。薫は意味も無く手を上げてはない。不良が誰かを襲っていた場合のみ制裁を加える。それ以外はほとんどが注意や説得だ。今日はこれで3組目だった。

「今日は帰るかな。」

薫は時計を確かめる。

時間は10時を過ぎていた。

薫を家に向かつた。暗闇と一緒になりながら。

## 学力調査テスト！？

俺は今友達と近くのレストランに来てテスト勉強をしていた。前にリングダと食事をした場所だ。

学力調査テストで午前中に学校が終わつたから飯を食べながらテスト勉強してゐるつてわけ。

「なあなあ薦。ここはどうやつて解くんだ？」

友人の一人が数学の質問をしてきた。自慢では無いが俺はそれなりに頭が良いのだ。

「ん？ ああここね。これはまずαをこうやつて求めてから代入して

…

「ああ解つた解つた！ これをこつするのね」

「そうそう」

友人が理解したところで俺は自分の勉強に戻つた。

ある程度勉強が終わつて俺はジュースを飲みながら外を眺めていた。周りの友人は（もつとも俺含めて3人だけ）黙々と勉強をしていた。ノートを書く音とジュースを飲む音だけが俺らの席では流れっていた。

ジュースが飲み終わつてしまい暇になつた。

友人達の方をチラリと見る。特に解らない問題が無いみたいだから俺は帰ることにした。

「俺帰るわ」

「解つた」

俺は「じゃあな」と言いながら席を後にした。が、すぐに戻つてきた。

「どうしたの？」

「いや何でも」とか言いながら汗をダラダラ流している俺。戻ってきた理由は一つ。後ろの席にリングダが居たから。

何故ここにリンダが居る…！

ここで帰つたらリンダに出くわし、友達に金髪美少女と知り合いだとばれたらこの後何されるか解らない…！運が悪ければ殺される…！

「ん？」

「どうしたのリンダ？」

「今どつかで見たことのあるような人が一瞬視界に入つたよ…？」

後ろの席から会話が聞こえる。確実にリンダだ。

頼む…！来ないでくれ！会いたいのは俺もやまやまなんだが友達にばれるのは避けたい！でも何で会いたいんだろ？まあ気に入つた奴に会いたいと思うのは普通だよねうん。そんなことを考えながら俺は席の隅っこに行つた。

「お前何してんの？」

「いや俺のことは気にしないで良いからうん。気にしないで気にしないで」

「お前どうかしたのか？」

「ある意味あつてるかな～アハハ」

「まるでここでは会いたくない人に会つたみたいな言ひぐさだな」  
鋭いなこいつ。

「さあ？」

「怪しいな～」

「何のことやらサッパリ。そんな」とより勉強しなさい…！」

「余計に怪しいな～～」

「明日テストなんだから勉強しろー！」

「へいへい

無理矢理言いくるめた

「やつぱり薫だ！ヤツホ～」

が終了のお知らせが来たようだ。

「よ、よつ…リンダ

リンダは席を乗り越えて話しかけていた。

「こんなところで会うなんて奇遇だね」

「あ、ああ」

今この状況では会いたくなかったよリンダさん。  
「何してるの？」

「友達と一緒にテスト勉強…」

恐る恐る友人達の方を見ると

「あ、俺用事思い出したから帰るわ」

「あ、俺も」

空気を読んで帰ってくれるようだ。

自分で頼んだ物の値段分の金額を置くと帰つて行く友達達。

俺の隣を横切る時に友達の一人に軽く睨まれた。

「ああ、明日俺は死ぬのですね」

「どうしたの薫。この世の終わりみたいな顔して

そんなことも知らずに話しかけてくるリンダ。

今はこの時間を味わうとした。明日に備えて。

## 学力調査テスト！？（後書き）

お読みになつてください。ありがとうございます。

変なところやおかしいところがあつたら指摘してくださるとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてください。構いません。修正を入れる可能性あるので」」と承ください。それでは次回をお楽しみください

## 学力調査テスト！？

「へ～、そうなんだ」

あれから数分経ち、今はリングダと一人で席に座ってる。その後リングダは一緒に居た茶髪の女の子と分かれてこっちの席に来た。代金は茶髪の子が払ってくれるらしい。

「意外と頭良いんだね薰は」

因みに今は何の勉強をしてたか、何が得意かを話している。

「意外とは失礼な…」

「あはは、『めん』めん。良くも悪くも無いイメージだったからさ」

「それなりに自信はあるんだぞー！中学校だつて結構中の上ぐらいいキープしてたんだから」

「へ～」

リングダは簡単な会話をするだけで嬉しそうな顔をする、勿論俺も嬉しいし楽しい。そういうえばリングダもテスト期間だから居るのかな？制服着てないけど

「なあ」

「何？」

「リングダもテスト期間で学校早く終わつたの？」

「ああ、私学校行つてないんだ」

「はい？」

「学校行つてないの」

もしかして試験に落ちたのかな？だったら追求しない方が良いよね。

「あ、ああ そうなんだ」

「あ、別に気にしないでね？落ちたとかじゃないから」

「え？じゃあ就職とか？」

「うん、そうだよ」

「どこで働いてるの？」

「何でも屋「ドリーム」って知ってる?」

「いや知らない。それに何でも屋?」

初めて聞く名前だ。名前からして何でもしててくれるっぽい所だけ  
ど…

「ここから少し離れたところにある店でね、頼まれたことを何でも  
する何でも屋なの。私含めて従業員は8

人。小さい店だよ」

まさかこの時代に何でも屋があるとは…。しかも従業員少ないし

…。

「じゃあ今日は定休日かなんか?」

「うんそんな感じ」

「どんな事を頼まれたりするの?」

「ん~?その時によるかな?工事の手伝いだったり製氷だったり色

々」

その後やったことあるものを聞いた。他にはベビーシッター や浮  
気調査、盗まれた物を探したりペットを探したり。本当に色々やる  
らしい。因みに請け負えない物もあるらしい。何でも屋じゃ無いの  
かとツッコミたいがあえて何も言わないことにした。

一番きつかったのはベビーシッターらしい。特にミルクあげ。

良く来るのは製氷らしく、どうやら氷系の能力者が居るらしい。  
他の人も能力者か聞いたが企業秘密だから言えないらしい。さつき  
言つてたけどね。

「まあそんなどこかな?そう言えば薫の趣味つて何?」

「ん?俺?俺は運動にゲームにマンガかな?」

「普通だね」

「そういうリングダは?」

「私?私は少女漫画に恋愛小説、あと節約に裁縫だね。良くぬいぐ  
るみ作つたりするよ。熊さんとか」

「おお凄い。そして以外」

「むっ。何が？」

「女の子ってショッピングが趣味だと思つてた」

「確かにショッピングが好きな子はいっぱい居るけど私はあんま買  
い物はしないな。お金が勿体なくてさ……」

「守銭奴？」

「違う」

からかつたら軽くチョップされた。

「いて」

「必要な物しか買わないだけ。使つ時は使つけどね」

「へ~」

ブー！ブー！ブー！ブー！

不意に誰かの携帯が鳴った。

「あ、ごめん私だ」

どうやらリングらしき。電話らしき。席を離れて化粧室に向かつ  
ていった。

数分経つとリングダが戻ってきた。

「ごめん、急用が出来ちゃった。先に帰るね

「ああ分かった」

まあリングダが帰るなら俺も帰るけどね。リングダと話すために居た  
わけだし。当初の目的は違うけど。

リングダが帰るのを見送つてから会計を済ました。やることも特に  
ないので家に帰ることにした。

## 学力調査テスト！？（後書き）

お読みになつてください。ありがとうございます。

変なところやおかしいところがあつたら指摘してくださるとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてください。構いません。修正を入れる可能性あるので、よろしく承ください。それでは次回をお楽しみください

## 学力調査テスト！？（前書き）

先週更新できなくて誠にすみません  
こんな事は一度とならないようにします。更新できない時は事前に  
活動報告で言う事にします。（用事など体調不良、ネタが思いつか  
なかつたなどが理由で）  
後4月12日？は修正しました

## 学力調査テスト！？

「ただいま」

返事は無かつた。外にも車は無かつたし、まだ帰ってきてないのだろう。薫は踵で靴を脱ぎ、2階にある自分の部屋に向かつた。カバンを部屋の隅の放り投げてベットに寝転んだ。

薫は天井を眺めながら自然とリンダの事を考えていた。

…今思うとリンダって凄く可愛いよな。腰ぐらいまで伸びた金髪も凄く綺麗だし、つてそんなこと考へてる場合じゃ無いじゃん。洗濯物洗濯物。

薫はベランダに干しつぱなしの洗濯物を思い出し駆け足でベランダに向かつた。

洗濯物を取り込んでいると車が停車する音が聞こえた。ベランダから外を覗くと薫の姉、滝川 翔子が帰ってきた。

薫はわざと洗濯物を取り込み終わらし、一階に行き翔子を出迎えた。

「姉ちゃんおかえり～」

「ああ、ただいま～」

そう言つと翔子さつさとリビングに行き、椅子に座つた。

「薫～コーヒー用意して～」

「へいへい～」

正直面倒だつたが疲れている事を考慮してに仕方なくコーヒーを用意する準備を始めた。

「仕事お疲れ様」

自分の分と姉ちゃんの分を用意しながら話しかける。

「もうクタクタ～。そういう薫は高校生活ビツなのよ

「ん～、充実してるよ～」

「は～あ、学生時代に戻りたいなちくしょ～～」

「自分で統制機構に入つたくせに

統制機構。それは能力者を統制する機関。と言つても警察の特殊部隊みたいな物だ。対能力者犯罪を主とし、能力者とエリートで構築されている部隊。SEED関連の事は全部ここが管理している。因みにここには今までどういうSEEDがあつたかもまとめているし、個人個人がどういう能力を持つていてるかも知られている。一部判明されていない人が居るが（俺の新しい能力とか）。

「それとこれは別よ。てかあなたも将来SEED統制機構に入るんでしょう？」

「うん、そうだよ。はい、コーヒー」

「サンキュー。今更言つのもアレだけどなんで統制機構の学校に入らなかつたのよ」

「あれ大学からでも入れるでしょ？だから今のうちに高校生活を満喫しようと思つて」

「青春つて良いな～」

「まだ青春してないよ」

「本当はしているんだけどねつとそう心の中であつた。

「はあ～～」

「何ため息着いてるの？幸せ逃げるよ？」

「迷信よそんなの。いや、彼氏出来ないかなつて」

「まずそのめんどくさがり屋直せばまだマシなんじや無い？」

「うつせ。個性と言え」

「嫌な個性だね」

「そう言つと姉ちゃんが落ち込んだ。何ともめんどくさい人だ。」

「もういい、疲れたから寝る」

「あ、拗ねた。そのまま俺の横を通り過ぎて一階にある自分の部屋に向かつていった。

ドアが閉まる音がした。姉ちゃんが残したコーヒーを自分のと一緒に飲み干して台所に置いた。

「さて、皿洗いして晩飯でも作るか。今日は姉ちゃんの好物にでもするかな」

今日のメニューを考えながら皿を洗い始めた。

## 学力調査テスト！？（前書き）

本文で紹介したので翔子の説明はしません

## 学力調査テスト！？

夕食を取り終わって部屋でテスト勉強していると突然携帯が鳴り出した。携帯を開いてみると友達からのメールだった。内容は…『リア充爆発しろ』

だつた。昼のことを言つてゐるのだろうか、てかテス勉しろ。『そんな事やつてる暇あるならテスト勉強しろよ』と返信したらすぐには返ってきた。今度は…

『うるせー！入学当初から金髪美少女の彼女とイチャイチャしやがつて！！』。（皿 メ：）。“”  
彼女と来たか…。しかも結構怒つてゐるし、この場合は嫉妬だけど。俺とリングダが彼女ねえ……。想像したらドキドキしてきたからやめた。取り敢えず返信するか。

『いや、彼女じゃ無いからな…？（＝　＝　』

『じゃあ証拠見せろ！（#　　）凸』

いやいやいや、証拠つて何だよ、どうも見せれば良いんだよわからんねえよ。取り敢えずそう言つた。

『いやいや、証拠つて何を見せねば良いの？；　　』

『そうだな……、携帯見せろ！メールの内容見せろー！（　　）。

\*　　ビシッ』

メールの内容か…。リングダとのメールの内容を見返してみた。特にメールはしていなかつた。これで誤解が解けると安堵しながら返信した。

『良いよ』

『絶対メール削除するなよ！したらぶちのめす！！（#　　）。  
と、まあこれが俺等の総意だ』  
どれだけに知られたのか気になつたから返信したら…  
『え？もう全員だけど？』

おまつ。てかどれだけぶちのめしたいの…？しかも総意つて…。

まあ冗談だろうけど

『お前等… (。 。 \* ) 』

『安心しろ、彼女じゃ無ければ何もしない、筈。彼女に発展したら祝福しつつ殺す』

『祝福になつてねえ… (\* 。 口。 ) 』

『大丈夫大丈夫実際何もしないから。少なくとも俺は祝福するから

( ^ ^ ) 』

その後、メールをしながらテスト勉強をした。メールで友達が解らないとこを教えたり俺が解らないとこを教えて貰つたり教え合いながら勉強をした。

## 学力調査テスト！？（後書き）

今回は短い内容となっています。顔文字はメールの時だけ使用します。

後々追加したり修正したりする可能性があるのでご了承ください。

## 学力調査テスト！？ Re（前書き）

大幅に書き戻したので出し直しました

## 学力調査テスト！？ Re

学力調査テスト当日

「よっ、薰おはよ～」

「お～原井。おはよ～」

「今日は早いな」

「まあね、なんか早く起きちゃつてさ」

そう。昨日は結構夜遅くまで勉強してたから寝坊するかと思つた  
けど何故か早起きできた。早起きして登校すると清々しいよね。

「にしてもお前いつもこの時間帯に来てんの？」

「ああそうだよ。バス通学なんで」

「あ～そう言えばそうだっけ」

そりやバス通学ならいつも早いわけだ納得。

「あ、そうだ」

「何だ？」

「早速携帯見せろ」

「いきなりだなおい」

「だつて昨日約束したじやん」

「確かにそうだけど……、勉強は良いの？」

「昨日一緒にやつたじやん」

「メールだけどな」

俺はズボンのポツケから携帯を取り出すと原井に渡した。

「ほい」

「どれどれ

見ても何も無いけどな。

「あ、本当に無い」

「言つたろ？違つって」

「消してないよな？」

「消してないわ。ところでみんなつて俺らの仲の奴らだよな？」

「ああ勿論だよ。流石に入学して間もないのにクラス全員に広めるわけ無いじゃん。まず興味ないだろ？」

「だよな。そう言えば今日のテストは数学と英語だよな」

「そうだよ。昨日のテスト順は酷いと思います」

「あ～、だよな～」

昨日の内容は一時間田国語、一時間田理科、三時間田が社会なのだ。

先生まじ鬼畜。

てかさ、英語勉強した？

一応した

薰つて英語出来る方？

出来ない方

基本何点ぐらい？

40点から50点

同じ位か

ああ

英語とかマジ無理

だよね～

原井と話していると不意に教室のドアが開いた。入ってきた人物はそのまま俺の所に来て：

「リア充爆発しろ！～」

と同時に全力の回し蹴りを繰り出してきた。

「当たるかあああ～！～」

頭を屈ませて避けた。ちょっとだけ髪の毛にかすったが問題ない。

「能力使つて避けんな！～」

「能力使わないと普通に喰らいますからね！～俺のS.E.E.Dが「身体強化」じゃないと当たるからね！～？」

「うつせ～！～当たつて死ね！～」

「お前空手部だろうが！～冗談になんねえよ～！～」

「良いから見せろ！～」

「自分勝手だなおい！～！」

「あはははー！」

さつきから俺たちの攻防を見てた原井が笑い始めた。まあ笑うよね、俺は必死だけど！！

「はいはいほらよ」

「どれどれ。げつ、ねえ。まじでねえ」

「言つたろうが。てかお前あの後勉強は？」

「え？ 何それ美味しいの？」

やはりやつてないかこのスポーツ馬鹿。

「今スポーツ馬鹿つて思つたろ」

「何故分かつたし」

「顔が語つている！」

「しまつた！」

「取り敢えず教えて！」

「何でだよ！？」

結局、スポーツ馬鹿こと篠本に数学を教えた。公式だけだけな。

そして一時間目の数学のテストが終わつた。一応心配して篠本のとこに行つた。

「結構できた！」

「出来なきやおかしいだろお前…」

今回の数学のテストは中学の基本問題しか無かつた。学力調査テストだからか、基本的な物しか出なくて簡単だつた。

「原井達は？」

近くに来ていた原井達に聞いてみた。因みに他の二人は遅刻寸前で來た。

「出来た」

「同じく」

「オワタ」

一人できなかつたらしい。まあこいつは昔から数学とか出来なかつたしな。

「まじ数学とか無理」

「でもお前他は出来るよな」

「ドヤツ？」

「さあ英語勉強しよ'ばざ」

「スルー！？」

そして英語のテストが終わった。

さて篠本は…あ、机に突っ伏しながら頭から煙り出してる。そこまで頭使ったのか。原井はつと、もう帰る準備してる。取り敢えず篠本起こして帰るか。

「おい篠本起きろ」

「へへっ、もう終わりだ…赤点確定だ…」

「明日挽回しような。取り敢えず帰ろ'づぜ」

「おう」

直ぐに篠本は起きて支度を始めた。

「帰ろ'づぜー」

原井は準備が終わってこっちに来てた。

「お～もひちよつと待つてくれ」

「今日もファミレスで勉強すんの？」

「今日は良いだろ。明日は保健と家庭科なんだから」

「それもそうだな」

「…、よし。帰るか」

「お～」

翌日のテスト明け

「じゃあ俺達部活あるから行くわ」

「ああ、じゃあな」

テストが終わって部活に入つてない俺以外の四人は部活に向かつた。俺は今日どうするかな？

校門を出て少し歩いてたらふと思い出した。以前にリンダが何で

も屋で働いていると言つていたことを思いだしたのだ。予定もないし気になつたから薫は何でも屋「ドリーム」がある中央街に向かつた。

「確かにここから少し先だつたな…」

街の地図を見ながら何でも屋「ドリーム」を探していた。良く行くファミレスの先を1?位歩いた先に小さい店があった。何でも屋「ドリーム」。どうやらここのような、2階建てではあるが確かに小さい店だ。

店を見ていると玄関らしきところから少年が一人出て来た。ひじょうに目立つ格好だつた。いや、この季節には場違いな服装をしていた。

春の真っ最中だといふのに長いマフラーで顔半分を埋めており、膝まである白い防寒コートを着込み、腰の部分までコートのボタンを閉め、コートのポケットに手を突っ込んでいた。その少年は薫の隣を通りつてきた。そこで初めて薫は彼の顔を見た。

髪は銀髪で、ライオンのような<sup>たてがみ</sup>鬚に似た髪型をしており、クールそうな顔つきをしていた。少年が通り過ぎると少し寒い風が取り抜けた。そこで薫は気付いた。自分と同じ能力者であると。能力者はSEEEDが強力過ぎると影響が出ることを思い出したのだ。

例えば炎のSEEEDが強力だと常人より常温が高いなど。彼の場合は氷のSEEEDが強力過ぎるから身体が冷氣を出しているのだろう。薫は納得し、店の方に向かつていった。

特に特徴は無さそうだった。どうやら一階部分は家になつてているようだ。外に一階に行く階段が取り付けられていて階段の隣に「事務所はこちら」と看板が取り付けられていた。さつき見えた何でも屋ドリームは一階の窓に書かれている物だつた。薫はある程度観察して帰ることにした。

友として？黒き暗殺者として？？（前書き）

今回から遂にバトル編が入ります。

友として？黒き暗殺者として？？

夜、自室の部屋でマンガを読んでいると不意に携帯が鳴り出した。薫は少し驚いてから携帯のバイブレーションを止めて確認した。篠本からのメールだった。内容は：

『助けて 港 テロ』

と、妙なメールだった。しかも本文では無く件名に書いていた。薫はこれが直ぐに冗談では無くマジだと気付いた。ここでの港でテロが行われる、もしくはその準備がされている。それを目撃してしまったため捕まる前にメールをしたのだと判断した。直ぐに助けに行こうとしたがピタッと仕度を止めた。それは篠本にブラックカーネイジの正体がばれてしまうからだ。薫に助けてとメールして何故ブラックカーネイジがくるのかと思うだろう。それが不安だった。助けに行けば確実にばれる。でも友達は見捨てられない。そんな葛藤が薫の心中で渦巻く。そして、薫が決断した答えは……

篠本はテロリスト「芽潰し」に捕まり、縛り付けられていた。

「リーダー！ 何でこいつを殺さないんです！俺たちのことを見たんですね！」

「馬鹿野郎！」

バキィ！

リーダーと呼ばれた男はその男を殴った。

「うぐつ！？」

「お前は何回言つたら解るんだ！？俺たちの標的は能力者だ！ＳＥＥＤを持たない者は無闇に殺さんで良い！－！」

「でも見られたんですね！？」

「殺さず捕まえておけば十分だ！」

一人のやり取りを聞きながら篠本は考えた。

薫にメールしてもう数分経つな。もう統制機構に連絡してくれたかな？メールはちゃんと削除したから大丈夫だろう。にしても、急いでるからって港を通るんじゃ無かつたぜ。ちゃんと学校の言う事は信じとくべきだつた。そうすればこんな恐い思いはしなかつたのによ……。

篠本は、学校の部活が長引いてしまい、急いで帰ろうと思つて港を通りて行つたら芽潰しの武器輸出を叩撃してしまい、運悪く捕まつてしまつた。そして、さつきの男に殺されそうになつたがリーダーと呼ばれる男が助けてくれたのだ。リーダーと呼ばれる男は自分たちのテロが終わるまで篠本を捕縛して捕まえたのだ。安全は保証すると言つ言葉を信じ篠本はおとなしくしている。

しかし、このテロは止めたいのが本心。でも所詮はただの高校生。何も出来ない。だから統制機構に姉が居る薫に頼つたのだ。…薫、頼むぜ。そう思い、篠本は空を見た。空は、満月が出ていてとても綺麗だつた。

友として? 黒き暗殺者として? ? (後書き)

区切りが良いのでここで区切れます。修正などあとで加えるかも知れません。次回に、期待ください。

友として？黒き暗殺者として？？

「さて、どうやつて闘うか…」

薫はそんなことを考えながら夜道を走っていた。

俺の能力「**身体強化**」<sup>スタイルアップ</sup>は運動能力を100%引き出す能力。成人男性が相手でも充分勝てる。相手が凶器を持っていなかつたらな。相手はテロリスト、銃器を持つての可能性が大だ。いくら「**身体強化**」<sup>スタイルアップ</sup>でも避けられる自信は無い。

それに刃物の可能性も無くは無い。刃物なら勝機はあるけど、1回でも刺されたらアウトだ。相手は戦闘のプロかも知れないし。…やつぱり、**黒き暗殺者**として闘うしか無いか。

薫の服装は**黒き暗殺者**の服装だ。そして薫は、友達として篠本を助けに行き、**黒き暗殺者**として闘うこととしたのだ。

家を出て約30分後に薫は港に着いた。薫は直ぐに近くのコンテナに隠れて様子を見た。

テロリストの数は、1人、2人、3人。武器は……スタンロッドか？銃器じゃなくて良かつたけど、刃物より最悪じゃ無いか！くそつ！

所で篠本は……居た。テロリストの近くに有るコンテナ付近に縛られて座っていた。

さて、どうやって助けるか…。篠本はコンテナの影の中に居るから良いけど、テロリスト達は月の光の中に居るから、俺のもう一つの能力範囲外だ。こんな時に満月とは…最悪だぜ。俺のもう一つの能力、「**暗闇同化**」<sup>ブラックシャドウ</sup>は対象が暗闇や影の中なら同化させることが出来る、そして暗闇や影の中を自由に動ける能力。簡単に言つと暗闇や影の中に入れるつて事だ。刃物なら刺されても服の中の影に同化させて防げたのに…。これじゃあ意味がねえじやん。何のために黒い服装してるんだか…。

薫はただ考えた。どうやつてあの3人を出し抜き篠本を助けるか。

生憎篠本まで繋がっている影が近くに無い。薫は場所を変えながら考えた……。移動していると影では無かつた場所が影になっていることに気付いた。

「…… そうだ！ 雲は！？ そう思い薫は天を仰いだ。雲は月の近くまでに来ていた。

「ナイス！ 雲があと少しで月を隠してくれる！ そうすれば影が出来て同化できる！ よし！ これなら……！」

「………… そして、雲が月と重なった。雲が月に重なり港全体は暗闇に支配された。

「今だ！」

薫は月が重なると同時に動き出した。即座に暗闇に同化しながら篠本が居る場所まで走つた。勿論影と同化しているから気配も足音もしない。

「よし、完璧……！」

「薫はそう思った。だが、現実はそうは行かなかつた。

「タバコでも吸うか」

突如篠本に一番近いテロリストがタバコに火を付け始めたのだ。  
「いいいつ！？ やばい！」  
「暗闇同化<sup>ブラックシャドウ</sup>」<sup>スタイルアップ</sup>は発動中に光が当たると能力が解除さちまうんだ！ しかも「身体強化<sup>スタイルアップ</sup>」と併用出来ないから今は標準の運動能力！ 間に合つてくれ――！！

「シユボツ！」

「うおつ！？」

テロリストがタバコに火を付けたと同時に薫は篠本はコンテナの影に同化させた。そして、火の光が薫に当たり、能力は解除された。  
「ん？ どうし…… 誰だてめえ！？」  
「ただの通りすがりのヒーローさ……」

友として? 黒毛脳殺者として? ? (後書き)

お読み下さりてありがとうございます。 次回の更新は来週の土日です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1071w/>

---

SEED

2011年11月27日17時48分発行